

ハバラ カズヒト  
 葉原 壽人  
 経済学部・教授  
 教養学士／東京大学

#### 主な研究業績

- “Regression Analysis of Yen-Dollar Exchange Rate”  
 KSU Economic and Business Review, No.25, 1998.
- 「為替変動の考え方」経済経営論叢 第33巻第3号 京都産業大学経済経学会、1998.
- “アジア通貨危機：金融市場技術からの視点”：京都産業大学論集社会科学系列第19号：2002.
- “Why Exchange Rate is indeterminate in Open Macro Economic Models”,  
 Kyoto Management Review Vol.2, 2002.
- 国際金融研究会：2008年5月  
 “非対称な国際金融制度下のドル基軸の帰結”
- 国際金融研究会：2008年10月  
 “非対称性と一般相対性理論宇宙項”
- ファイナンス研究会：2009年5月  
 “時間の価格理論試論—特殊相対性理論的接近”
- 国際金融研究会：2011年7月  
 “The Price Theory of time span: From special relativity to general relativity”
- ファイナンス研究会：2011年7月  
 “The hypothetical prices of multi-speed time”
- 国際金融研究会：2011年9月  
 “Asymmetrical Structure of the world financial markets”
- 国際金融研究会：2011年10月  
 “The trajectory of the yen-dollar exchange rate, Interest rate, interest rate, budget deficit, current account”

#### 研究テーマ

# 非対称性の帰結

#### 概要

非対称的な国際金融システムの理論の体系化

戦後国際金融体制の1つの特徴は、金本位制に比べ、対称性が破れている事にある。現在のドル基軸体制下での米国経常収支赤字の持続は様々な不安定要因を内包している。特に、米国赤字持続は世界のドル建て金融資産残高を増加させ、その他通貨建て金融資産に転換される過程で、世界の金融資産残高の増加テンポを重層構造のターンパイク軌道に乗せる。金融資産は、供給サイドがスティープであるため価格変動が激しく、往々、正規分布の枠を超えて不連続にジャンプし、世界の金融資産残高の膨張・収縮をもたらし、世界的な金融危機を繰り返しながら増加基調を続ける。これは、尻尾が頭を振り回すかの如く、実態経済へ大きな影響を及ぼす。このように、非対称的な国際金融システムは、異時点間の資源配分に漏れを発生させ、現在・未来の交換過程で効率性を著しく低下させている。残念ながら、現在の国際金融システムには、世界的金融資産残高の膨張に歯止めをかける仕組みが内在していない。この現象を体系化するためには、一般相対性理論(宇宙項等)から宇宙物理学(インフレーション宇宙)に至る理論的な枠組みを取り入れて、時間軸を明示的に取り込む理論的な再構築が必要である。その前段階で、黒字主体と赤字主体の通貨圏では、金利水準・現在と未来の相対価格が異なる速度で変化し、為替相場の変動を伴うと考えた時間の価格理論を、特殊相対性理論の観点から組み立てる必要がある。全体で、時間軸を重視した金融理論の再構築作業となる。

#### 応用分野

幅広い金融論・国際金融論・投資理論等の分野への応用が可能